「空が真っ黒になるほど、Ｂ２９爆撃機が編隊で襲来」

山岡　幸子　（８９歳）

私は愛媛県喜多郡大川村（現在の大洲市）出身で、現在 89 歳ですが、どこも悪くなく元気です。

昭和 20 年終戦当時、尋常高等小学校 2 年生でした。山に囲まれた田舎のほうでしたが、終戦 5 年程前から、B29 爆撃戦闘機による爆撃に見舞われました。ひどいときには、一日おきくらいに、５０機から６０機くらいで編隊を組んでやってきました。本当に空が真っ黒になり、怖い気持ちに襲われました。すり鉢のような地域の谷間に住んでいましたが、てっぺんの家がいくつも狙われました。バリバリバリという、耳をつんざくような轟音で爆撃されたのです。家は穴だらけで大変でした。戦争中は、村で何回もお葬式がありました。

学校では、連日のように先生が指導して、竹やり訓練が行われました。藁人形をくくりつけて、それを先が尖った青竹で突くのです。今から考えるとばかげていますが、あの時は真剣でした。

終戦のその日、学校の先生に呼ばれて「さっちゃん、日本は戦争に負けたから、農作業用の用具を置いて、おうちに帰りなさい。」と告げられ、あたふたと帰宅した記憶が残っています。年上のいとこのご主人が戦死して、戦争未亡人になっていました。私の家族はみんなで、畑や田んぼの農作業の手伝いをして、子ども

４名を抱えたいとこ家族の、生活を手助けしました。

　戦後の食糧難は深刻で、大洲市の街から、私たちが住んでいた田舎へ、食糧の買い出しに、わんさと街の人々がやってきました。みんな大きなリュックや袋を担いで、丸一日かけて歩いて来ていました。

　１８歳年上の兄とは２年ほど連絡がとれず、不安な日々を過ごしました。怪我もせず帰ってきたのが、何よりの救いでした。

　戦争は何もいいことはありません。恐ろしいだけです。